

性的マイノリティについて ～学校現場で求められる多様な性の学習～

非営利型一般社団法人日本 LGBT 協会 代表理事 清水 展人

【性的マイノリティに関わる言葉の紹介】

(1) 性的マイノリティ (性的少数者) とは

性的マイノリティとは、同性愛や性別に違和感を感じる人々をはじめ、現在の社会のなかで「異性を愛するのが当然」「性別は男と女しかない」という「これが普通」「こうあるべき」だと思われている「性のあり方」に当てはまらない人たちのことを、まとめて指す総称のことです。

(2) 性の多様性について

性の多様性について理解する指標として、SOGIESC (ソジーク)

Sexual Orientation / Gender Identity /

Gender Expression / Sex Characteristics

という4つの要素があると言われています。

①性的指向

恋愛感情や性的な関心・興味が主にどの性別に向いているか、恋愛感情や性的な関心・興味の有無や強さ

②性自認

自分がどのような性別であるか又はないかについての認識

③性表現

服装・髪型・しぐさ・喋り方などの外部的な表現

④性的特徴

染色体・ホルモン値・筋肉量・体毛など、生物学的な性別を示す身体的特徴・行動特性

(3) LGBT とは

LGBT とは、

L (レズビアン = 女性同性愛者)

G (ゲイ = 男性同性愛者)

B (バイセクシュアル = 両性愛者)

T (トランスジェンダー = 出生時に割り当てられた性別と、性自認が異なる人)

の頭文字を取った呼称で、性的少数者 (セクシュア

ルマイノリティ、性的マイノリティとも言います) を指し示す言葉として使われます。

その他に IS (インターセックス = 染色体パターンや内外性器等が性別判断の医学基準に合致しない人) や Q (クィア = 性的マイノリティの総称 / クエストショニング = 自分のセクシュアリティの特定や、名づけることを避ける人)、A (アセクシュアル = 無性愛者) 等、性は多様に存在しています。

呼称として、LGBTI、LGBTIQs、LGBTIQA 等も使われています。本稿においては、国連の広報に用いられており (注①)、一般的に使用される (注②) 「LGBT」と表記します。

このような LGBT は 8.9 % いる (注③) と言われており、身近な存在と言えます。身近に存在する性的マイノリティの当事者ですが、安心してありのままの自分を語り過すことができる学校環境や社会環境は構築段階であり、また悩みを持っていても、外見上分かりづらいこともあり、表面化されにくい課題でもあります。

ゲイ・バイセクシュアルの方を対象としたレポートでは、自殺を考えたことがある人は 65.9% (厚生労働省エイズ対策研究推進事業)、性同一性障害で受診した人を対象とした調査では、58.6% が自殺念慮、28.4% が自傷・自殺未遂、29.4% が不登校 (岡山大学病院ジェンダークリニック) というデータもあります。

社会的な偏見や差別は依然として残っており、「生きづらさ」を感じる当事者や家族が存在しています。

注① 国際連合広報センター「LGBT 声をあげ、差別をなくそう」

注② 棚村政行「セクシュアル・マイノリティ入門」(月報司法書士 No.533 2016年7月)

注③ 電通ダイバーシティティ・ラボ「LGBT 調査 2018」より。全国の 20 ~ 59 歳の個人 60,000 名対象の調査。

【文部科学省 取り組みの経緯】

平成 16 年

「性同一性障害特例法」施行

平成 22 年

「児童生徒が抱える問題に対しての教育相談の徹底について」発出

平成 26 年

「学校における性同一性障害に係る児童生徒に関する状況調査」の実施

平成 27 年

「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細やかな対応の実施等について」発出。全国の国公私立、小・中・高等学校に性的マイノリティの子どもについて配慮を求める通知を行った。

平成 28 年

文部科学省が教職員向け周知資料を作成し公表

平成 29 年

高等学校の教科書に「LGBT」記載

平成 31 年

中学校の道徳の教科書に「LGBT」記載

【知識や理解の普及の必要性】

私は、三人姉妹の長女、展子として生まれました。幼少の頃から好んでズボンばかり履いていました。



【写真左：清水展人の母と妹 右：清水展人の幼少期、当時は吉田展子】

小学生の頃からは好きになるのは女性で、周囲の女友達と何かが違うという事に気づいていましたが、高校生になるまで“これは誰にも知られてはいけないことだ”と思い過ごしていました。性や自分の生き方、将来について悩みはたくさんありましたが、体への違和感や恋愛について、本心で誰にも相談できませんでした。



その理由のひとつに、子どもの頃から“オカマ”“男女”等という差別的な言葉が交わされ、教科書を含め、性の多様性について正しい教育環境も整っていませんでした。自分からはかわかれても仕方がないのだと考え、自分の悩みは誰にも言ってはならないと思っていました。

【無意識に発せられる言葉やサインの重要性】

悪気なく発した無意識の言葉の中にも、今までの性差による固定概念が含まれていることがあります。「男の子の中でサッカー部に入りたい人はいませんか？」実際に当時、私が先生から言われた言葉です。サッカー部に入りたいと言う勇気がもてぬまま時間は過ぎていきました。

安心して自分自身のことを語ったり、語らなくとも自分は自分で良いと感じることのできる学校づくりには、周囲が発する言葉や態度そのものが大切です。男性、女性の概念にこだわらず、一人ひとりの性を尊重する姿勢やサインが大きな影響力を持っています。

【高校生時代の私の葛藤】

高校に入学すると同時に、今までの自分はおかしいと思い、女の子らしくなろうと決断、大好きなジーンズや服を捨てました。また、化粧品用品を購入し女の子らしくなろうと努力し、青年とも交際しました。しかし、実際は青年を好きになることはできず、自分はどうすればいいのかと、悩みは深まる一方でした。

当時の私は、性の多様性についての指標はもちろ

ん、性的指向や性自認なども知りませんでしたので、自分が何者か分からず、大混乱していました。

【共に知り、向き合う強さを】

そのような私でしたが、あるドラマを機に、自分の性について明確になっていきました。「三年B組金八先生」というドラマで、性同一性障害の話題がありました。今まで学校の性教育では触れられることのない内容をはじめて知ることとなりました。知ることが現実と向き合うことで、楽なことばかりではなかったと思いますが、私だけでなく全ての人にとって知ることがスタートだったと思います。

その後18歳の時に彼女ができ、友人や両親にも泣いて声を震わせながらカミングアウトしました。そして、病院でGID：性同一性障害（その後GD：性別違和へ、更に現在は性別不合へ名称が変化しています）と診断を受けました。

【自分らしい未来が描ける社会へ】

しかし、すぐに家族や周囲が理解を示してくれる状況ではありませんでした。母親は「なぜ、そのような険しい道を選ぶのか」と泣き崩れ、精神的にも落ち込みました。父親は「そんな人の働けるところはない。結婚もできない。一生、一人で生きていくのか」と社会の厳しさを説きました。両親だけでなく兄弟とも喧嘩を繰り返す日々でした。

ドラマをきっかけに性について少しばかりの知識を得た私でしたが、将来像を描くことはなかなかできませんでした。当事者であると堂々とカミングアウトしている人との出会いもなく、モデル像もなかなかありませんでした（後になって、クラスメイトにも校内にも私以外に性的マイノリティの当事者がいたことを知ります）。

手術、戸籍変更、進学や就職について、考えれば考えるほど、不安に押しつぶされる日々を過ごしました（「夜の世界でなければ仕事がないのではないか」と話をしていた両親や家族も、当時未来像が見えなかったと言っています）。

【周囲からの偏見と生きづらさ】

そのような状況の中で、私は性自認に身体を合わせるために、ホルモン治療を開始することとなりました。男性ホルモン治療によって、ニキビが増え、声が低くなるなど、体が少しずつ男性化していきま

した。体に変化していくことにより喜びもありましたが、外見が少しずつ中性的になると、電車の中や人ごみを歩くと、足の先から頭までジロジロと人に見られるようになりました。

すれ違いざまに、見知らぬ人から「あの子は男？女？」「女でしょ」「いや、男だろう」と言われるようになりました。その言葉は、いつも私の心に突き刺さりました。気がつけば私は、戸籍上は女性、氏名は展子ですが、見た目が男性化し、トイレに行くにも躊躇するようになりました。

また、男性ホルモン治療をスタートしてからは女子競技として行ってきたサッカー部を自ら退部し、大好きなスポーツが行えないようになりました。電車に乗ると人目が気になり、息が上がり、冷や汗がダラダラと流れました。

心の中で“私はこの世の中で、息もろくに吸えなくなってしまう。トイレに行きたくても、行けなくなってしまう。自分らしく生きようとすればするほど、母や家族を悲しませてしまっている”と感じるようになり、こんな私は生きていても、社会の誰にも喜ばれない。何のために生まれてきたのだろうと思いつめ、自殺を何度も図ろうとしました。

【2004年性同一性障害特例法が施行】

その後、2004年に性同一性障害特例法が施行され、要件を満たせば戸籍上の性別記載を変更できるようになり、私の生きる希望となりました。

しかし、当時、手術を終えていない等要件を満たしていなかった私は、就職活動にも悩むこととなりました。本当の自分自身のことを打ち明ければ採用されないのではないか、差別されるのではないかという不安もありました。

結局、家族と話し合い、戸籍を重視し女性として働くこととなりました。当時私は、子どもたちに交通指導をする仕事を行っており、仕事内容はとても楽しく自分に合った職業でしたが、すでに病院で心の性自認が男性であると診断を受けていたため、女性として務めることはとても辛いことでした。

毎日自分で弁当を作り、無駄遣いをせず、懸命に貯金したお金で21歳の時に海外へ行き、手術を行いました。手術は9時間に及ぶもので、全身麻酔を行いました。手術後体への痛みはあったものの、「これで好きなTシャツが着られる！」と喜びの気持ちでいっぱいでした。

術後、家庭裁判所で氏名、性別の変更を行い、新たに「展人」と名付け、戸籍上男性としての人生が始まりました。

【バリアはどこから生まれているのか】

しかし、現実には戸籍変更後にもたくさんの障害がありました。戸籍上の性別や氏名が変更していても、女子大学を卒業していた事実はそのままです。教職員免許を取得していた私は、教育関連の企業に履歴書を持って面接に伺いましたが、「なぜ女子大学の卒業なのですか」と聞かれることもありました。正直に性に違和をもって過ごしてきたと話を打ち明けても、「はじめてそんな人と出会った」「TVでしか見たことがない」「うちにはそのような人を一人も雇っていない」「対応しかねる」と、今までの努力や頑張りよりも性同一性障害という診断があることに面接官の焦点がフォーカスされ、性別適合手術の話が大半の内容で面接が終わることも少なくありませんでした。

戸籍上の性別は変わったはずなのに、生きづらく息苦しい、ありのままの自分が出せない。ここまで懸命に自分を貫いて頑張ってきたけれど、何のための戸籍変更だったのだろうと思うこともありました。

法的な整備は重要なことですが、それと並行して周囲の人々の正しい知識・理解の普及が広がることの重要性を実体験しました。

その後、面接を受けては断られてを繰り返し、苦戦した就職活動でしたが、その末に、「男性も女性も関係ない、畳が担げるかどうかの方が知りたい」と電話を下さった畳屋さんで畳職人として戸籍変更後再スタートをきることとなりました。当時は、男らしく振る舞わなければ自分は受け入れてもらえないかもしれないと考え、まだまだ、ありのままの自分に自信がもてずにいたのですが、共に働く先輩方にたくさん話を聞いて頂き、「世の中にはまだ差別があるかもしれないけれど、負けずに夢に向かって頑張れ」と励まされました。

その後、私は自分の人生を振り返り、私と同じように悩める人の心に寄り添う仕事がしたいと考えるようになりました。また「全人間的復権」という言葉が私の心に突き刺さり、人の心の立ち直りの支援をしようと、社会人入学で医療専門学校へ進むことを決意しました。

高校を卒業したばかりの若い学生に囲まれなが



ら、背水の陣という気持ちで正月もクリスマスもほとんど勉強して過ごしました。結果的には最短で国家試験にも合格し、勤めたかった精神科での勤務もその後叶うこととなり、性的マイノリティの相談や治療にも関わるケースもでてくるようになりました。

【幸せのかたち、家族のあり方も多様】

また、学生時代に（現在の妻となる）彼女との出会いがありました。男子学生として過ごしていた私が元々女性戸籍だったと知った彼女はカミングアウトの際かなり驚いていましたが、ありのままの私を受け入れてくれ、コンプレックスとして感じていた私の過去の歴史も“あなたの個性”“あなたの魅力”だと繰り返し伝えてくれました。そして、さまざまな逆境を乗り越え2012年に結婚することとなりました。

また、2019年5月に待望の第一子を授かることもできました。まだまだ子どもを授かりやすい国内の医療環境とは言い切れませんが、理解を示してくださる方がいることも現実です。

【学校現場における多様な性と生の学習】 ～生命の誕生について～

卵子と精子により生命が誕生する学習を、私自身も学生時代に度々経験しました。このことを学習することは重要であると認識しています。

しかし、卵子と精子による生命の誕生や異性間のみ家族のあり方のみで授業が終わってしまっては約8%存在すると言われている性的マイノリティの当事者はどう感じるでしょうか？

私は当時、性やジェンダーに関する授業を受講すれば受講するほど、自分自身の生き方は間違ってい

るのではないかと、自分自身はダメな人間なのか、と感じるようになりましたし、ありのままの自分に自信がもてませんでした。

私が提案させていただくのは、卵子と精子による生命の誕生に関する授業を行った際や、男性や女性の体のしくみについて学んだ際に、性のありようが多様であるということや、家族の形が多様であることを一言添えていただきたい、または性的マイノリティについても同様に機会をつくり学習していただきたいということです。

具体的には、多様な性のあり方や多様な家族のかたちについて、実際に家庭科の教科書を使用して学習していただくこともひとつです。

また、家庭科の授業にとどまらず、保健体育の授業や人権学習等の機会等、他教科の先生方との連携や人権教育担当の先生方とも協力し、多様な性について正しい知識を持ち、理解を深められる学習の機会をつくるのが生徒さん方をはじめ、学校教育に携わる全ての人にとって非常に重要であると考えています。

異性間のカップルだけではなく、同性間でパートナーシップを組み生活しているケースもありますし、私のように戸籍を女性から男性に変更して結婚しているケースもあります。

また子を持つパターンもさまざまです。同性カップルの場合、養子縁組を行い子を育てているケースもありますし、私のように元々女性の身体で生まれた場合は、男性戸籍に変更しても精子が存在することはありませんので、AID（非配偶者間人工授精）を行い、第三者の方からの精子提供によって子を授かるケースもあります。このように実際には家族のかたちや生命誕生までのプロセスも多様化してきているのです。



現在は、今までの経験を生かし、同じような境遇の人の力になりたいと、性的少数者が生きやすい社会を目指して啓発活動を進める非営利型一般社団法人日本LGBT協会を設立し、代表理事を務めています。

【人権教育講演で実体験を聞いた高校生の声】

一部ご紹介

- ・性別は2つだけではない、ということが一番印象に残った。
- ・男はこうあるべき、女はこうあるべきと、決めつけるべきではないと感じた。
- ・体に心を合わせるのではなく、心に体をあわせることが大事だということを知ることができた。
- ・AB型や左利きの人と似た割合で性的マイノリティの人たちがいることに驚いた。
- ・当時者の人の中には自殺などに追い込まれる人もいるということに心が痛くなった。
- ・戸籍を変えられることに驚いた。
- ・知らないことがたくさんあった。
- ・今までの自分が恥ずかしくなった。

【共に社会で生きる私たち、「知る」ことから始めてほしい】

表面化しづらい性的少数者の課題ですが、調査では約12人に1人いるとも言われており、実際には先生方の身近な生徒や共に働く同僚、上司、実習生、親御さんの中にも当事者は存在しています（私自身も将来、子どもの担任の先生に必ずしもカミングアウトするとは限りません）。

「自分の周りには性的マイノリティの人はいないだろう」と決めつけず、目には見えなくとも、むしろ性的マイノリティの人々は身近なところで共に生活をしているという意識をもつことも重要です。

一人ひとりが発信するサインによっては、自己否定感や孤独感を感じてしまう人、生きづらさを感じる当事者や家族も存在します。

逆に肯定的な発信や姿勢を示し続けていけば、性的マイノリティの当事者はもちろん、その他の悩みを持っている方々にとっても生きやすいと感じられる雰囲気をつくっていくことができると考えています。

多くの方々に性的少数者に対する正しい知識や理解を広げたいという想いで取り組んでいます。私ひとりの力では限られています。



是非、先生方のいらっしゃる学校現場でも共に、誰もが自分らしく輝ける社会に向かってお力添えいただけましたら幸いです。

性的マイノリティの当事者を代表して、今回メッセージを届けさせていただきましたが、私にできることがありましたらまたこの文面を期にご連絡ください。どうぞよろしくお願いいたします。

全国各地で性の多様性や自身の実体験をもとに講演し理解の普及と啓発を行っています。

【学校で性別に違和感を持つ児童・生徒が感じる不安と、その具体的な対応方法例】

・服装

自認する性別の制服着用を認める。

・髪型

清潔さを損なわない範囲で、本人の意思を尊重する。

・学用品

名前シールなどの男女の色分けをできるだけ避ける。自認する性別のスリッパ着用を認める。

・更衣室

職員更衣室や職員トイレ・多目的トイレを更衣室として使用することを認める。

・トイレ

職員トイレ・多目的トイレの使用を認める。

・通称の使用

公式行事では自認する性別の名前で呼ぶ。

・授業

自認する性別として名簿上扱う。

・水泳

補修として別の日に実施する。上半身が隠れる水着の着用を認める。レポート提出で代替する。

・宿泊研修

入浴時間をずらす。

(文部科学省：性同一性障害や性的指向・性自認に係るきめ細やかな対応の実施について 教職員向けリーフレットより)

【現在の活動】

- 非営利型一般社団法人日本LGBT協会 代表理事
- B・FM791 清水ひろとの広がるラジオ 番組パーソナリティ (全国で聴取可)
- ダイバーシティ推進 障害者・高齢者施設 代表
- LGBT 特設相談窓口 行政機関 連携 相談員
- 医療専門学校 医学概論／精神医学／精神治療学／臨床心理学
- 人権学習／道徳／家庭／保健体育／総合学習 特別非常勤講師 など

【資格】

中学校 II種 教育職員免許状
作業療法士免許
絵本セラピスト® 大人に絵本広め隊等

【各種お問い合わせ】

◆メールアドレス

(講演会のご依頼・ご相談等)
hiroto.simizu1010@gmail.com

◆ホームページ

日本LGBT協会 lgbt-kyokai.com
清水展人 (しみずひろと) hiroto-simizu.com

